

## カトリック香里教会 年間第3主日 2021年1月24日

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

—マルコ 1 章—

### キリストに従って歩む

ヨナは始め、預言者としてニネベに行くことを拒みました。「ニネベ」は、北イスラエル国が滅ぼされ（BC721）、要人たちが幽閉されて行った先、アッシリアの首都です。この敵国の救いを企てる神の預言者となることがヨナには耐え難かったのです。

北イスラエル滅亡時、要人たちの多くは南のユダ国に亡命し、残った要人たちはすべてアッシリアに連行されて二度と帰ることはありませんでした。残されたガリラヤ地方は、占領国の入植者たちによって民族の混血が図られ、南のユダ国からは「異邦人の地」と蔑まれるようになるのです。『ヨナ書』は預言書の形式をとっていますが、ユダヤ教の異教への排他主義に対するレジスタンス文学として、以後、偏狭なユダヤ教に「神の慈愛と寛容の精神」がもたらされていくことになる貴重な書です。

北イスラエル滅亡の200年後、ユダ国もバビロニアに滅ぼされ、捕囚を経て帰還（BC538）を果たしますが、それから500年にもわたる神の沈黙を経て、この“海沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民”に一条の光が差し込んだのです。イエスはこのガリラヤから宣教（AD28）を始めました。ペトロをはじめ、イエスの弟子たちは、このガリラヤ地方でイエスに呼び止められ、すべてを置いてイエスに従った人たちです。

先の見えない沈滞した暗闇の中で、彼らにとってイエスとの出会いは、きっとこの苦境を一変させる自分たちの救いを抱かせたに違いありません。しかし神の救いの計画はヨナの使命と変わることなく、イエスから教育された弟子たちが、民族を超えた「全世界の救い」の礎となる召命だったのです。博愛の神、主イエスの心に弟子たちが真に出会ったのは、イエス生前に於いてではなく、復活のイエスと出会ってからであり、その「神との出会い」は殉教をも厭わず世界の救いのために身をささげる人へと弟子たちを変えていくものでした。

洗礼によって神の子とされた私たちの召命も、自分の救いのみならず、神の光が届いていない、未だ「暗闇の世界への救い」のための召命であることを心に留めたいものです。

